

基調講演

地域減災力の育成

講師 室崎 益輝氏

(総務省消防庁消防研究センター所長、神戸大学名誉教授)

1. 阪神・淡路大震災の教訓

最初にいただいたテーマは「地域防災力の育成」でしたが、今日のテーマとも非常に密接にかかわることで、「防災」という言葉をやめて「減災」という言葉を使わせていただきました。なぜわざわざ変えたのかということ、私なりに正しく解釈すると、減災と防災とどこが違うのかという話をしてから、講演の中身に入りたいと思います。

「防災」とは災害を防ぐ、被害を防ぐということで、これは小さな災害に対しては言えることなのです。例えば寝たばこという災害を考えてみると、寝る前にたばこを消せば防ぐことができるわけです。あるいは、ついうっかり寝てしまったとしても、寝ている布団を防災製品という、たばこが万一落ちても炎の出ない繊維を使った布団、シーツを使っていれば、たまたまたばこが布団の上に落ちてでも火事にならない。つまり、少しいろいろと工夫をすれば防げるものです。しかし、これは小さな災害については言えますが、阪神大震災やスマトラの大津波のようなことを考えると、完全に防ぐことはどう考えても難しいわけです。そういうときは、防ぐことは無理にしても、一人でも命を救うことはできないかというところで、防ぐのではなくて、減らすという考え方で、これから自然大災害と向き合っていこうというのが、「減災」ということです。

少しその中の哲学的な意味合いは、大きな自然に対する小さな人間、我々人間は非常に小さいのだということで、そういう大きな自然に立ち向かっていこうと思うと、小さな人間ができることは何かというと、みんなの力や知恵を寄せ集めて、それに立ち向かい、対処していくほかないのです。哲学的には、人間のそういう至らなさや弱さを踏まえた上での災害の取り組みということです。

では、方法論的なことでいくと、これは対策の足し算による被害の引き算です。被害を引き算していくのですが、いろいろな対策を足し算していきます。

例えば家具の転倒防止をすると500人の命が救え、家の耐震補強をすると1000人の命が救えます。それから、これは関電に考えてもらわなければいけないのですが、通電対策をしっかりとやると1000人の命が救えます。少しそういうことを足していくと、例えば大阪の上町台地が動くとき6000人から1万人死ぬということであれば、今言ったようなことを一つ一つ積み重ねていけば、1万人が5000人になり、5000人が2000人になり、うまくいくと2000人が1000人になります。そういう形で取り組んでいこうというのが減災で、方法的な減災の定義は「対策の足し算」です。

小さな人間が対策の足し算をし、それぞれの持っている能力や知恵、才能あるいはいろいろなことを出し合います。知恵のある人は知恵を出す、お金のいる人はお金を出します。これは当然、行政と市民の間でもいえることですし、市民の中の、市民相互の間でもいえることです。それが阪神大震災で私たちが学んだ、一つの到達点になってくると思います。

今、阪神・淡路大震災で学んだと言いましたが、減災という言葉を別の言葉で言うとうどうなるかが、このレジュメに書いてある(140ページ参照)、事前の備えと地域の備えが大切ということで、これは説明は要らないと思います。起きてから頑張るのではもう遅いと思うのです。家が壊れて人が死んでしまったら、どうにもなりません。人の命はそう簡単には取り戻せるわけではありませんから、そんなことなら家の掃除や整頓、家の補修や修理などをしておけばよかったという話になってくるわけです。お金がなければ家の修理はできないけれども、せめて座敷机を横に置いて、机の横に寝ておけばよかったというのが、阪神大震災の大きな教訓で、これはやはり事前にしっかり心掛けておかないといけないのです。

もう一つの教訓は、やはり地域がすごく大切です。阪神大震災でも4万人が生き埋めで、そのうちの5000人が残念ながら亡くなってしまって、あとの3万5000人が助け出されました。助け出したのは地域、隣近所です。家族、隣近所の人が3万5000人のうちの8割程度を助け出したので、そこから言えることはまさに地域の力が大切になるということです。

反省材料として、たくさん火事が出ました。どうして燃えたのかというと、いわゆる地域における市民消化の活動が困難な場合とか、いろいろな理由があるのですが、遅れてしまいました。そのとき、もしみんなで頑張って、バケツ

リレーなどをしていたらというのが反省材料です。いずれにしても、地域が頑張ればかなりのところまで被害を少なくすることができるというのが教訓なのです。

そうすると、事前に努力する、どこで努力するかというと、地域で努力することです。事前に地域の被害を防ぐための力をしっかり地域の中で作り上げておくことがなければ、次の南海地震や、上町台地で起きるであろう地震には立ち向かっていけません。

阪神大震災はいろいろなことを教えてくれましたが、とどのつまりは、事前に地域で減災の力をつけることに尽きると思います。今日のこのセミナーも、地域の減災力をつけるにはどうしたらいいのかということになってきます。

2. 備えと地域減災力（140ページ参照）

地域の減災力を考えたときに、三つの備え、三つの減災力という言葉を使っています。

三つの備えですが、お相撲さんでも横綱になろうと思ったら、三つの条件が要るのですが、それは心技体です。実は私も学生時代、柔道をやっていて、そのときも心技体なのです。防災も一緒に、「心」というのは心、「技」というのは技術、知恵や技（わざい）、「体」はつながり、システムです。相撲の場合の体は、体格、体力で、人間の体でいうと神経系統や脳や筋肉のバランスとつながりがなくといけなくて、頭ばかり体力があっても立ち向かえない。そこに筋力とか神経、心臓などの臓器のネットワークが必要になって、体というのはネットワーク、システムだと理解していただきたいのです。

例えば、子供さんが淀川に落ち込んだというケースを念頭に置くと、防災というのは、その子供を助けることなのです。助けようと思ったら、何が要るのか。まず橋の上を歩いていた人が、おぼれている子供を見たときに、子供を助けようと思う勇気なのか、優しい気持ちなのかよく分かりませんが、飛び込まないといけません。このためには、心が必要になります。ちょっとデートで、もう遅れているから、きっと誰かが助けるだろうとか、私の仕事は子供を助けることではないから、俺なんか助けなくてもいいだろうと素通りしてしまうと、これは心がないです。満員電車の中で女の子が、酒を飲んだおじさんからかわれている。そのときにちょっとどうしようかと思うのだけれど、まあ寝たふ

りをしておこうかという、心がないです。要は、心がないとまずいのです。

だから、防災というと、ボランティアでも何でもそうですが、自分の家や家族を守ろうという気持ちがなければなりません。私などは最近、外国に行くときに保険に入らないのですが、これはちょっと心がないです。もう子供に対する愛情が薄れているから保険に入らないのかもしれないです。だから、皆さん方は地震保険に当然入られていると思いますが、入っておられないのは、原点は心がないのです。

では、心だけで助けられるか、飛び込んだだけで助けられるかという、答えはノーです。最近はお母さんが飛び込んで、子供が助かってお母さんが死ぬというケースがあります。これは何が間違いだったかという、泳ぐという技術がないと助けられないです。だから、阪神大震災のときにいっぱい人がやってくるのですが、おいしい豚汁一つ作れなければ、これは気持ちがあっても、悪くすれば足手まといです。どうしてまきをくべるのですかといちいち聞かれているとうまくいかないので、地域でもそうです。みんなで炊き出しをやるというのだけど、誰もまき一つくべることができなければ、これも全くゼロです。

技術というのは、単に豚汁を作ったりまきをたくだけではなくて、救急救命では、また淀川の話に戻りますと、子供さんが泳げないと、陸まで引き上げることができません。陸に引き上げたら、どういう技術が必要かという、心肺蘇生法で人工呼吸をするという技術です。これもまた日本の実施率は極めて低いのです。進んだ中学校などでは、今この心拍蘇生法を、必修でもないのですが生徒さんに教えているところもあるし、少なくともAED（自動体外式除細動器）の操作法などそんな難しい話でないので、教えるところはあるのです。

大阪府庁で全職員を対象にしてAEDの訓練をされたかどうかという辺から問題です。多分やられていないと思いつつ、皮肉っぽく今言っているのですが、こういうレベルで大阪府が市民を助けるなんて、とても言える状況ではありません。その技術や能力を持った職員一人ひとりが、どこかの場面で府民を助けることができるわけです。まずその府の職員自身が、そういう非常に優れた技術というか、だれでも持っていないといけない技術を獲得しておかなければいけない。技術が必要なことはたくさんあります。アマチュア無線の技術もあるし、赤ちゃんのお守りをする技術もあります。避難所に行って上手に赤ちゃんをあやすことができると、それだけで大きな力なのです。

技術だけでなく、多少知識もります。どうすれば家具の転倒防止ができるのか、何も炊く道具がなかったらビールの空き缶でご飯を作れるといったことは、能力なのか知識なのかよく分かりませんが、知識の持つ知恵と技能がないといけないというのは、技の世界です。

ではあと、それで技があったら助けられるのかというと、また淀川の話に戻りますが、引き上げてきた子供さんを病院に連れていこうと思ったら、その人は車を持っていなかったの、車を持っている人を呼び止めないといけない。あるいは携帯電話を持っている人に頼んで、119や消防に連絡してもらわなければならない、その一人だけでもうまくいかないのです。一人で頑張って助け上げたとしても、その人と一緒に、車で病院に運ぶ人、消防に連絡をする人などがいて、それぞれのいろいろな才能を持った人がつなぎ合わせて、そこに一つのネットワークができたときに初めて、子供が助けられるのです。

心と技術とつながり、その三つがないといけない。だから逆に言うと、地域減災力の形成や防災教育で一体何を教えるのかというと、心と知恵と技能と、そのつながりを教えることがなければいけないことになります。

その三つの備えを別の言い方をすると、結局、減災力ということになって、意識とか心、助けようとか、人の命は大切だと思う心と、それからおいしいご飯を作ったりする技術は人の問題ですから、人をどう育てていくかということです。学校教育もそれなりにしっかり頑張っていたかかないといえないけれども、地域教育とか社会教育という、いろいろな形の人づくりの力とか、教育をするというのは、備えの1番めと2番め、心と知恵の部分は、人づくりというところで進めていくのです。

では、つながりとは何かというと、実は二つの種類のつながりがあるのです。先ほどの淀川の話に戻ると、私が話したつながりは人間のつながりです。ドライバーがいけないし、アマチュア無線士がいけないし、例えば泳ぎのうまい水泳選手がいけないと助けられない。これは人のつながりです。実はそのときに、その人を病院に運んでいく道路がきちんと整備されているとか、あるいは119をかけたなら消防署につなげるために、きちんと電話の回線がつながっているというのは、これは電話の回線や道路、ライフラインがあるというのは、空間のつながりです。公園があるとか、せせらぎの水路が流れているとか、グリーンベルトがあるといったことは全部、空間のつながりで、つな

がりには人間、人のつながりと区間のつながりがあります。

人間のつながりはどうしてでき上がっていくのかというと、「ことづくり」という言葉がありますが、「こと」とは、みんなで地藏盆をしたり、家の前の打ち水をしてみんなで環境整備に努める、あるいは大掃除を一緒にやるとか花火大会をする。そういうことが全部「ことづくり」で、それによって人のつながりがどうしてできるかというと、何か共通の目標を持って、その目標を一緒に達成していく。難しければ、日曜日に洗車コミュニティといって、水が出るところに車を持ってきて、みんな一緒に車の掃除をする。一緒に仕事をする事で人はつながるということです。一緒に何かいろいろやるような仕組みや仕掛けを作るとというのが、ことづくりです。

空間のつながりは何かというと、まちづくりになります。ブロック塀を生け垣に替えたり、私などが言うのは、みんなが花を、例えばこの通りはキンモクセイの通りだとか、この通りはバラの通りだとかといって、バラを飾って町をきれいにしていくという気持ちで、そういう取り組みで町をよくしていく。掃除をするのは「ことづくり」か「まちづくり」か分かりませんが、できればそういうまちづくりの中で、コミュニティ・センターを作ったりしていくのが空間のつながりということです。

そういうことなので、備えや減災力をキーワードにしなが、さらに詳しく幾つか大切なことを話したいと思います。

3. 心の備え・減災の意識 (140ページ参照)

1番めが心の備えですが、いちばん難しいことだと思います。盛んに今、例えば耐震補強をしましょうと頑張っって声をかけたり、家具の転倒防止をしましょうと声をかけるのですが、実施率がすごく低いです。兵庫県住宅再建共済制度といって、義援金の前払いみたいな運動を進めているのですが、みんな義援金の前払いのつもりで毎年5000円ずつ出してください、そのお金で災害で家を失った人に600万ずつ配ろうというシステムで、一生懸命声をかけているのですが、なかなか伸びないです。参加者の比率が、まだ10%にいていないです。みんなで本当はそういう共済保険や、そういう取り組みに参加してほしい。少なくとも家具の転倒防止ぐらいは100%早くしてほしいと思うのですが、これも非常に進んだところで20~30%ぐらいしか進んでいません。

どうして進まないのか。家の耐震補強はまだ分かるのです。お金がかかるから進まないという説明がつくのですが、家具の転倒防止は、上手にやったら50円ぐらいでできるのです。だから、その50円でできることをしないのはどうしてかという、これはお金の問題ではないです。どうしてかという、建前はみんなやらないといけないと言っているのです。本音の世界でいうと、自分たちは大丈夫だとか、そんな面倒なことは今すぐしないで、そんなにすぐには来ないとか等々で、結局はやりたくないのです。

私が先ほど海外に行くときに、保険に入らないと言いました。どうして入らないのかという、いろいろへりくつを言うのです。海外の旅行保険の保険率は、保険会社がもうかる料率なのです。あんなものに1万円も2万円も出すのはばからしいと思うから、私は入らないのです。実はその1～2万円は払わないで、ニューヨークに行ってステーキを食べたほうが良いと思っています。要は価値観が違うわけです。本当は命や家族を守ろうと思ったら、保険に入らないといけないことは、建前では分かっているけれども、本音で言うと、ちょっと財布も寂しいし、ニューヨークに行ってステーキを食べたいという、これは心の問題です。それがいろいろなところに出てきて、結局はなかなかみんながやらない。それではだめなのです。

その心を変えようと思って、みんな刑罰をつけて、保険を掛けない人は罰金を取る、駐車違反を防ごうと思ったら駐車違反の料金を高くするというのが、今の日本の社会です。何か水を飲む気のない馬を、幾ら川の端にもってきてもだめなように、そういう形では防災や減災は進まないです。では、どうしたらいいのかというのは、なかなか難しいです。気持ち、やる気をどうして生み出すのかということですが、それはみんなで頑張らないといけないことを強調しなければなりません。一つは、やはり地震や災害が起きたときの悲しさを伝えないといけないのかと思います。地震で親が亡くなるのがどんなにつらいとか。二度とそんな目に遭いたくないという思いを伝えることが必要ですし、南海地震は必ずやってくることを伝えなければいけません。

私の思いは、もし私があるコミュニティに頼まれたら、一軒一軒リスク評価します。あなたの死ぬ確率は幾らです。隣の人の死ぬ確率は、今後30年以内に死ぬ確率、あなたの家は20%、隣の人は10%、向こうの人は5%です。レッテルを貼って、危険な家に「この家は危険です」とやると、はたと気がつきます。

どうして隣は5%で、我が家は50%だと思えば、ちょっとこれはおかしいということで、評価をしてあげるのもいいのかもしれませんが。危険性をどうやってきちんと知らせるのかということだと思います。

その危険性は、今後50年間、このまま進むとしても大変な時代です。多分、地球の運命が決まるぐらい大切な50年間だと思うのです。そういう中で、いろいろな事件、事故、災害が降りかかってくる。それに対してどう備えるかは、やはり地球が今危機にひんしていることを伝えないといけないのです。

恐竜が死ぬとき、恐竜は何を思っていたかとよく考えるのです。結果的にはこれは隕石がぶつかったのか、氷河期が来たのかよく分からないですが、恐竜は氷河期が来ることは知らなかったと思います。知っていたら、もうちょっと違った振る舞いをしていただろうと思うのです。恐竜も人類も一緒です。今の人類も、いつか滅びるのですが、どういう形で滅びるかを、どれだけ意識しているかということです。そうすると人類が滅びるといふか、滅びる姿が見えてきたとしたら、今自分たちの命や生命などを守るために、何をしなければいけないと考えるか。まさにこれをリスクといふか、我々の置かれた状況を知る、あるいはそれを知らせるといふことです。

あとは命の大切さといふか、阪神大震災の被災者の声などをしっかり伝えていくことがないと、多分いけないだろう。博愛と安全の大切さもなかなか難しいです。人が人を平気で殺す社会に今生まれているわけで、これをどのように触れるか、なかなか難しいです。根本に起きている貧困の問題や格差の問題をなくせば、かなりの部分は解決されるかもしれないけれども、多分それでも解決されない問題を取り越えないといけません。それはやはり生物、動物や植物の持つ命の大切さを、自然とのふれあいで学ぶとか、老いていくことの素晴らしさ、尊さみたいなものを、お年寄りや子供さんが一緒に触れ合うことによって学んでいく。そういう機会を計画的に作っていかないと、命の大切さなど、なかなか伝わらない。でも、これもしないといけないということです。

あとたくさんあるのですが、あとは行政があまり役に立たないということで、火事が起きても行政などはちっとも消しに行きません。普段は違いますが、地震のときは消しに来てくれません。これももっと論理的にいうと、私たちは地震のときに助けてもらうだけの税金を行政に払っていませんので、地震が起きたときに消防自動車は来ないからと、怒ってはだめなのです。もし助けてもら

おうと思ったら、あと5倍ぐらい税金を払っていただくと、消防も来てくれるかもしれないし、救援物資もその日のうちに届くかもしれない。でもそれだけの行政の力はないのです。高福祉・高負担との関係で言うと、高い安全は高い負担からしか来ないので、結局行政はあまりしてくれませんから、自分たちで火を消さないといけないし、自分たちで助けないといけない。これはやはり人を助けることは大切だと考えないといけないことになってきます。

まず、心は教育の中の一番の根本です。ちょっと「知識の前に意識」というのは私の好きな言葉で、一生懸命、教養番組を見たり、ハウツーものの知識で「グラツときたら火の始末」とか、そんなことを幾ら教えてもだめです。まずは意識、気持ちです。気持ちができたら、もっと原理というか、基礎力を教えないといけません。これも何度も私が言ったことで、阪神大震災でグラツときたら机の下ということで、机の下に潜った人がたくさん死にました。だから、ハウツーものの知識は非常にもろいです。でもそれが、例えば逃げるときにはどうのこうのとか、いろいろな本がたくさん本屋さんに並んでいます。それは悪いものではないですが、ほとんどそこに書いてある知識は、私からいったらほとんど間違いです。電車の中で地震に遭ったらこうしなさいとか、こういうときにはこうしなさいとかたくさん書いてあります。

しかし、それは試験の山かけみたいなものです。こういう問題が出たらこう答えろという丸暗記、山かけと丸暗記を強制しているもので、そういうことではなくて、臨機応変というか、その場その場で人間の取るべき行動は違ってきます。耐震補強をした安全な建物にいたら、グラツときたら机の下でもいいのですが、古い建物の中にいたらグラツと来たら机の下でなくて、すぐにすっ飛んで逃げなければいけないのです。だから、地震が来たら家の中にいなさいと言うのか、すぐ逃げなさいと言うかはケースバイケースなのに、無理やりいろいろな本を読むと、こういうときはこうしなさいと書いてあるわけです。難しいです。

「津波でんでんこ」があるのですが、津波が来たら親でも子供を放ったらかして逃げろというのは、これは津波の来る地域の言い伝えなのです。かといって、きれいごとで議論するときは、子供やお年寄りを連れて一緒に逃げましょうなどと言っているのですが、これはケースバイケースです。一人で逃げろと推奨しているようですが、そういう判断力は養わないといけません。

今のは少し心というか、気持ちで、グラッと来たら火の始末などは知恵や技術の話で、泳げなければ溺れた子供は助けられないというのが原点です。

4. 知恵の備え・減災の技能

では、あらゆる技術を持っていないといけないかというところは、後でつながる話ですから、何か一つ特技を持っていたら、いざこういう災害を乗り越えていけると思っています。ともかく、知識や技能をしっかり身につけていく。これはいろいろあります。知恵の伝承があり、真夜中に爪を切ると失恋をするとか、よく分かりませんが、それはどうしてかという、今はいいのです。今は夜中でもこうこうと電気がついていて明るいので、爪を切るときに間違っ爪を切らずに、身まで切ることはありません。しかし、これも昔のように夜はあまり電気を使わなくて暗い家だったら、夜中に爪を切ってはいけないということがあります。これは一つの生活の知恵として伝わっていきます。グラッと来たら竹やぶに逃げろというのは、断片的な単なる知識になってくると間違っことがあります、やはりいろいろな地域の中に、生活の知恵とか文化がいろいろあって、それをしっかり身につけていくことは知恵の伝承と言いますが、地域に即した知恵です。

先ほども少し単純なというか、個別の知識を丸覚えするのはいけないことに関連すると、家の中にずっといい地域と、家からすぐに飛び出さない地域があります。これは地域の状況、地盤によっても違っし、断層がどういう方向に走っているかが分かれば、家具の方向は、この地域は東西、この地域は南北に置いたほうがいいと、家具の置き方も地域によって決まっきます。地域がどんな地域なのか、年寄りばかりの地域と若者が多い地域では当然違っますし、昼間みんながお勤めに行っているかどうかでも違っきます。あるいは、そういう中から、地域には地域にふさわしい技術や技能があり、屋根はどういうものでふくとか、屋根を重くする地域も軽くする地域もあります。だから、阪神大震災のときは、間違っ知恵で、屋根瓦が重いからだめだと、一斉にみんな屋根瓦を軽くしたのです。これは軽くしていい地域も確かにありますが、重いほうがいい地域もあるのです。これは台風が来るとか、ほかの災害との関係もいろいろあります。そういう意味で、地域の持っている知恵をしっかり伝えていくことが知恵の伝承ということなのです。

もう一つは技能の習得で、たかがバケツリレーですが、されどバケツリレーで、バケツリレーの技能は相当な技術が要ります。人が何メートル間隔に並ぶのか、それから水をかけるときの腰の入れ方、角度は幾らの角度で腰を構えたら、水が遠くに飛ぶか。並び方も、重いバケツを運ぶ列の間隔と、それから帰りは戻すのです。重い水の入ったバケツが来て、今度は帰りのほうは人の間隔が違うのです。これをしっかりやると、都市大火を防ぐことができます。

どうして、そういうものを獲得していくのかということです。これは地域の知恵を考えると、今まで運動会などでバケツリレー競争などしている地域があるのですが、バケツリレー競争など全然面白くないのです。昔の人はどうしたかということ、鞍馬の火祭とか、幸神というお祭りなど、いろいろなところであるのですが、全部それは火祭りです。火祭りは、あるときは収穫のお祭りだったりするのですが、収穫のお祭りをしながら、実は防災訓練をしているのです。火をどのように制御するのか。鞍馬の火祭など、子供にもすごい火を持たせるのです。それで歩かせるわけです。そして最後は火を消すところまでやるのです。その中で、火をコントロールする技術を身につけていくわけです。それから、盆踊りを昔やりましたが、あれは仮設住宅を造るといっておかしいですが、あれは土のうを積んだり、やぐらを組んで縄で縛って、はしごをかけたりします。いわゆる防災のためのとりでを作るための地域のシステムを、盆踊りのやぐら作りでするのです。盆踊りはもう一つ、お見合いの場としても機能するのですが。

ですから、単にバケツリレーだけやっても面白くないのだけれど、文化の中できちんと訓練を持ち込んでいって、小さな子供のときからそれをやっていると、みんなやぐらは組めるし、バケツリレーはできるし、いろいろなことができるという流れになっていくのです。まさにそういう意味で、「火祭りからDIG」へというのは、これはDisaster Imagination Gameという最新のゲームで、後でDIGよりもっと大切なクロスロードというゲームもされると思いますが、訓練のしかたをいろいろ工夫しながら、みんなが身につけていき、ごく自然に減災、知恵の力を高める仕掛けをしっかりと作っておかないといけないわけです。

5. つながりの備え・減災の連携（141ページ参照）

3番めが人のつながりです。ここでいうのは連携、パートナーシップです。対策の足し算の中で重要なのが、人と人との足し算をどうしていくのかというところで、最近の重要なキーワードとしては「きずな」という言葉や、ネットワークやパートナーシップなどいろいろな言葉が使われますが、人のつながりをどう作っていくかということです。

人のつながりで言うと、コミュニケーションとコーディネーションとオペレーションとコラボレーションがあります。コミュニケーションは情報の共有で、特に行政と市民の連携を図るときに、やはり行政の持っている情報を、どうやって市民のものにしていくか。あるいは市民が持っている非常にミクロな個別情報を、いかにして行政に挙げていって、簡単に言うと市民の気持ちはすごく大切な情報ですが、市民の気持ちや要望、欲求といった声を、どうやって行政に伝えるかはコミュニケーションの問題で、コミュニケーションの仕組みをしっかりと作っていくことです。

二つめのコーディネーションというのは、お互いがお互いのよさを認め合いながら力を合わせていくことです。どうして先生はいつもピンクのパンタロンと紫色のスーツなのかと言われたのですが、別に緑のパンタロンと黄色のスーツでもいいのです。要はコーディネートというのは、ピンクのパンタロンが偉いわけでもないし、赤いスーツが偉いわけでもない。でも赤いスーツとピンクのパンタロンがコーディネートされたときには、ものすごい力を発揮して、格好よく見えるのです。1 + 1 = 3とか4みたいなもので、ピンクという素晴らしさと、紫色という素晴らしさが一緒になることによって、よりもっと大きな素晴らしさになるのです。

コーディネーション、コーディネーターというのは、それぞれの持っているよさをつなぎ合わせて、引き合わせる力が、ボランティアコーディネーターです。そのためには、それぞれのよさが分からなければいけない。この人は赤ちゃんのお守りがうまい、この人はボタン付けだということ、この人とこの人をこうやれば素晴らしい救援ができるということです。コーディネーションで基本的に重要なことは、お互いに認め合うことです。行政と市民の信頼関係に基づく関係性が、コーディネーションです。

オペレーションは、一緒に運営をすることです。企画から、いろいろなこ

とを決めるときに、みんなで一緒に考え、みんなで一緒に議論をして、みんなで一緒に決定をすることがコオペレーションです。

コラボレーションは、働くときはみんなが一緒に汗を流す。よく盛んにコラボレーションを「協働」という言葉に変えて、協働と参画という言葉になるのですが、その四つの原則がまとめられないといけないと思います。

それはそれとして、ここで重要なことは二つのつながりで、人間のつながり、世界を超えたつながりと立場を超えたつながりです。先ほど司会の方も、次の地震が来るときは子供が大人になっているという話をしていたと思います。次の働き手は子供だから、子供をしごこうということではないですが、子供はすぐ素直だし、感受性に富んでいるし、命の問題は本当は子供が一番よく分かってくれるのです。そういう子供の感性を大切にすることも必要だし、あるいは子供の大人に対する影響力というか、子供が頑張れば大人が頑張るのです。私の好きな言葉に、親がなくても子は育つというのですが、要は子供がなければ親は育たないというか、子供が非常に素晴らしくなることによって、家族や大人が変わっていくことがあります。これは担い手としての子供、つなぎ手としての子供というか、いろいろな大人と大人をつなぐのに、子はいかにということに尽きるのかもしれませんが。子供は地域力を考える場合にすごく大切なので、やはり子供が生き生きと防災に取り組む地域を作らないといけないことが、世代を超えたつながりの話です。

もう一つが、立場を超えたつながりで、昔は行政と市民という二局構造で物事を考えていたのですが、現代社会は行政と市民の二局構造ではうまくいかないのです。行政と市民の間に、もう一つ中間組織、第三の組織がうまく絡んでこない、世の中はうまくいかないことに今なってきています。行政ができないことはたくさんあります。行政のできることはマスケアとって、一度に多くの人を助けようと思うとできるのです。仮設住宅は阪神・淡路大震災のときに不評があったのですが、みんな28平米の標準タイプのを造るのです。本当は災害救助でいくと、3種類ぐらいあり、小さな家族用と大きな家族用と3種類あるのですが、いちいち小さなものと大きなものを造り、さらにそれぞれの被災者に、あなたの家族は何人家族ですか、あなたは洋間と和室とどちらがいいですかなど聞いていると、5万戸という仮設住宅は供給できない。マスケアは全く同じ確率で、要するにみんな同じようにして配らないといけないとい

うことで、標準化です。

昔、公営住宅のプランが標準住宅といって、日本の家族には、みんな同じ形の同じ住宅を配りました。行政というのは悪く言うと、公平でないとか、あそこにはおいしいお米がいて、こっちはパンだったら不公平だといって、かえってそのようにパンだけしか配らないことが阪神大震災で起きました。行政の発想はそうで、みんなパンだったらパンにしたいと思うのです。しかし、そういう形ですと痛いところやかゆいところに手が届かないわけです。本当の細かなニーズに答えようと思ったら、行政ではとてもできません。

では、市民はできるのかというと、市民はかゆいところはどこかは分かるのだけれども、手を持っていないので、やはりそこへサポートができない。その間を埋める、要するに手を持っていたり、能力や才能を持っていたり、ある特技を持っているというグループです。それは生協でも社協でもいいし、青年会議所でもいいし、NPO、ボランティアでもいいし、それ以外の職能団体でもいいし、いろいろな専門家のグループでもいいのです。そういう人たちが市民と行政の間に入って、そこを潤滑油のようにつないでいくことによって、強くなる仕組みです。今はボランティアとかNPOは単に人手が足りないから言っているのではなくて、新しい社会の仕組みとして、第三の力を育てていかないといけない。それが立場を超えたつながりの中でいちばん重要で、まずはそういう第三の力をどうやって地域の中に作り上げていくのかということです。

それは今NPOや学校、企業、専門家などいろいろな言い方をします。最終的に言うと、行政、市民、CBOというのは町内会のことで、Community-based Organizationです。NPOはNon-profit Organization、これはボランティアです。それ以外に、中間組織というのは生協や社協、青年会議所などで、私は最近、青年会議所がすごく好きなのです。それから学校、小学校、中学校、先生がた、それから企業です。事業所、それから専門家。専門家がいちばんだらしませんが、大学の先生や技術士などです。ですから、建築家の人たちも、もっと立場を超えて被害を減らすことにだれでも参加していけば、姉菌問題など起こさないとと思うのですが、ボランタリーな心がないので、そういう技術が間違えて使われることが起きると思うのです。

いずれにしても、立場を超えたつながりの中でいうと、地域の中に大工さんや看護師さんなどいろいろな人たちがいて、そういう人の能力をうまく引き出

すようなつながりを、地域社会の中にしっかり作っていかないとけません。

ですから、先ほどちょっと子守の上手な子供の話をちらっと言いましたが、それはどこから来ているのかというと、兵庫県の加古川にグリーンシティというニュータウンがあります。ここでは市民一人一人に、あなたの特技は何かということで特技マップを作るのです。そうすると、けっこう私は力仕事が入りまじりとか掃除が入りまじりとか、小学生の子供が、私は赤ちゃんの子守が得意だとか、みんな書くのです。その特技をみんなで理解し合って、そういう特技マップを作ってコミュニティを作っているのが加古川のグリーンシティです。すごく大切なことだと思います。おいしいご飯が炊けますとか、買い物に行くのが好きですとか、家の壁に絵をかくことができますとか、地域の中にどんな人がいるのか。いちばん重要なのは、どこに大工さんがいて、どこに看護師さんがいるかは、地震が起きた直後はいちばん重要です。そういういろいろな能力を持った人たちの人と人とのつながりを、どのように作っていくかということがすごく大切になってきます。

6. つながりの備え・・減災のまちづくり

もう一つのつながりが、まちづくりという空間のつながりの話です。最近、人のつながりというとすぐ分かります。阪神・淡路大震災の教訓はみんなで助け合ったことだということで、自主防災組織を作ったり、ボランティアの取り組みをしたりすると、あたかも安全になるように錯覚している人があるのです。しかし、これは先ほど子供の能力と技術と一緒に、ソフトな技術や取り組みではやはりだめなのです。究極は、体質そのものを変えなければなりません。幾らかぜ薬を用意しても、幾らいろいろなことをやっても、やはり体が丈夫でないといけません。ところが、今のぼろぼろの町に我々は住んでいるわけです。家は壊れてしまう、町は燃えてしまう。体質の中にはソフトな体質もあります。コミュニティがすぐ崩れてしまう。そうでなくて、燃えない町、壊れない家、崩れない社会を作っていないといけないので、まさに町というか体質、空間をよくしていけないといけないわけです。

私の話の得意技ですが、おいしいもなかというのがあるのです。大阪は菊屋のもなかですか、おいしいもなかは皮が薄い、あんこは十勝の小豆を使ったりして、つなぎもいいのです。つなぎは菊屋のノウハウです。でも、あんこがよ

ければ皮が薄くていい。ここが重要なのです。逆に言ったら、コンビニエンス・ストアなんかで売っているもなかは、あんこが悪いです。安上がりで作っているのです、どう対応するかというと、皮を厚くするのです。

私たちのまちも、実はまずい町というか、危険な町は、中のあるこが悪いです。家が老朽化、裏宅地になっていて、住んでいる人が悪いのではなくて、それは法律が悪いのですが、4mの道路に接していないと、家は建て替えてはいけないなどという妙な法律を作るので、いつまでたっても立て替えられず、みんなぼろ家に住んでいるのです。それから、自分の家だけ守ろうと思って、大きなブロック塀で自分の家を囲っている家があって、人のつながりもないし、空間はぼろぼろです。

そうなってくると、行政が頑張って大きな道路だけ造るのです。大きな堅い車ばかり走る道路で、まずいあんこをごまかすような町を作ってきているのです。それではやはり本当にまずいもなかと一緒に、本当においしくしようと思ったら、まずあんこをよくしないといけません。つまり、自分の家の前の路地裏や隣の家との境目を一つひとつ、つよくしていき、ついでに家も修理して、少し安全にしていかないといけません。まちの中の本当の公共とは、幹線道路や巨大なダムや高速道路は公共ではなくて、みんなで顔を突き合わせる、一緒にみんなが使っている路地や小さな公園などが公共です。そこをよくしていこうと思ったら、行政ではほとんどできません。そこに住んでいる人たちが、バラを飾ったり、バラを植えたり、木を飾ったりとか、夕方になるとみんな出てきて水まきをするとか、忘れてしまっていますが、年に2回ぐらいは大掃除をしっかりとやるとか、時々はパトロールを試みる。あるいは子供と一緒に町並み探検隊を試みるという形で、小さなみんなが使っている路地や小さな道を、みんなで管理し、清掃していくという力があって初めて、「あんこ」はよくなるのです。そういうコミュニティができれば、周りは別に幹線道路や巨大な防災施設がなくても、安全なまちはできるわけです。地域の力でしかそういう空間はつくれないのです。

昔は下水道が普及していなかったので、結果的に私たちが子供のころは下水道がないので、家の前の溝をみんなで総出で溝掃除を週1回とか月1回したのです。そうすると、一緒にやることによって、その道をきれいにするとか、少なくとも地域がみんなでやるがあったのですが、そういうことが今失われ

てきています。そのことがやはり地域の力を弱めていくので、今はなかなか溝掃除はできないかもしれないけれど、むしろわがまち、みんなのまちをどうすればいいかを語り合うことです。これを最近の言葉でワークショップといい、みんなで話をして、みんなで育てていくように、まず「まちあるき」から出発して、「まちそだて」をして、最後に「まちづくり」をしていく。みんなの思いをみんなで実現する取り組みが、まちの中に生まれてこないといけないだろうというのが、まちづくりになっています。

7. おわりに (141ページ参照)

「非常時を考えて日常時を正す」ことは、一番最初の話の「事前の備え」に行き着きます。もし地震が来たらどうなるかと考えると、非常時、地獄が見えてきます。そうなったら困るなと思って、私たちがすることは、日頃の行いで、そういえば最近1週間に1回しか掃除しなくなったなというところを直していく。あるいは隣の人と挨拶もあまりしていないなといったところを、正していくところに尽きるのだらうと思います。

安全とは、安全の防災のために防災をするのではなくて、アメニティというか、自然や文化があって、コミュニティで人と人のつながりがあれば、結果としてセキュリティは来るわけです。だから、防災まちづくりといって、単に防災の訓練をすることではなくて、日ごろからいい環境を作る、いいつながりを作ることを、しっかりしておかないといけないことになってきます。

8. ビデオについて—三つのつながり

一つは知恵の備えというか、知識の獲得というプロセスで、これは発見的方法というのですが、受け身的に知識を吸収するのではなくて、行動的に、行動することによって知識を身につけていくという一つの教育の方法が示されていると思います。

それからつながりということかというと、三つのつながりで表現されています。一つは子供たちどうしのつながりが、ここでいろいろな形で具体化されています。二つめは大人とのつながりで、ボランティアとして大学生や高校生がリーダーに入ってくれるといいと思いますが、お兄ちゃんと子供たちのつながりがそこにでき上がる。それから地域を挙げていくと、おじいさんとかおば

さんなど大人とのつながりがそこででき上がってきます。そういう意味での人のつながり、大人とのつながりができ上がる。最後に、地域とのつながりで、地域のいろいろなものを知ることによって、子供たちが地域とよりつながっていくという、つながりづくりとしても非常に重要な取り組みだと思えます。これで終わらせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。

阪神・淡路大震災の教訓

大震災の2大教訓

- (1)事前の備えが大切
- (2)地域の備えが大切



いま何をすべきか？

地域での
持続的な減災への備えによる
減災力の形成

備えと地域減災力

持続的な備えが減災力を育む

地域の3つの備え

- (1)心の備え・意識
- (2)知恵の備え・知識と技能
- (3)つながりの備え・ネットワークとシステム

地域の3つの減災力

- (1)ひとづくり力・心と知恵
- (2)ことづくり力・人間のつながり
- (3)まちづくり力・空間のつながり

心の備え・減災の意識

減災にむけての意識を育てる・知識の前に意識

- ⇒博愛と安全の大切さを知る
 - 命の大切さを伝承と体感で知る
- ⇒リスクとハザードの厳しさを知る
 - 敵を知り己を知ること・21世紀の危険を直視する
- ⇒自助と扶助の大切さを知る
 - 公助の限界性と即地の有効性を知る

つながりの備え・減災の連携

減災をうむ信頼と連携を構築する

(担い手の足し算としてのパートナーシップ)

- ⇒世代をこえたつながり
 - 子ども(小中学生)を中心にした地域防災
 - 担い手としての子ども、繋ぎ手としての子ども
- ⇒立場をこえたつながり
 - 行政、市民、CBO、NPO、そして中間組織
 - さらに学校、企業、専門家がネットワーク

おわりに

非常時を考えて日常時を正すこと
アメニティがあってコミュニティがあればセキュリティがついてくる